

# J. Keats の詩に於ける「死」と「愛」の諸相

出口 泰 生

はじめに

## 1. 「死」の諸相

- (1) 「死の恐怖」 **Timor mortis**
- (2) 「死の冥想」 **Meditatio mortis**
- (3) 「死」の感覚

## 2. 「愛」の諸相

- (1) 「愛」の歪み
- (2) 二人の女性
- (3) Fanny Poems 「愛」の陶醉
- (4) 「愛」の分析

結 び

はじめに

*Adnais* の死を、495の詩行をもつて追悼した詩人は、Keats にとって極めて重要な転機をなす1819年のイギリスのすがたを、

年老いた頑迷狂気、賦しき末世の王。  
民衆の笑い草となり、汚れた泉の泥をかむる、なまくらな血すじの滓たる王子たち。  
衰弱した国に蛭のようにへばりついて、やがて攻められるまでもなく、血を浴びて地に倒される。  
見ざる感ぜず知らざるの為政者たち。  
飢えて未耕の畑に傷つき苦悶する人びと。  
自由の破壊と犠牲を、両刃の剣として、  
すべての人びとにむかう軍人。  
邪道、殺害の血の滴たる大法。  
主なき、神なき宗教—聖書はとじられたり。<sup>1)</sup>

このように詠嘆したのであつた。しかしながら、この Shelley ほど democrat の政治意識と精熱に欠ける *Adnais* Keats は、この「裂しい嵐の時代」<sup>2)</sup> を、彼の群生活におけるもつとも mellow な季節に転じたのであり、むしろこれらの外界のものよりは、一層真摯に内界のおのれの岩にむかつたのである。そしてそこには、「外」の混沌と無秩序よりは、より孤独な愛と死への志向があつた。けれども、こうした詩人の愛と死の孤独な相は、現実生活の混沌と苦悩とから絶縁して存在したの

ではなく事実は、云うまでもなく自明である。Keats は乱世のなかに生れる高貴の僧のように、「内なる世界」において、闘争し、冥想し、苦吟したのである。

1819年の2月から4月にかけての期間は、Keats のいわゆる “strange period” であるとされている。彼はこのあいだ殆んど絶筆状態であつたし、また心身ともに、一種の放心状態であつたのである。この詩人には屢々こうした心身の無感覚状態が来訪したのであるが、それ以前の放心に比して、この「奇妙な時」におけるその状態はきわめて著しいものである。むろん詩人の外的な環境は、先の Shelley の詩にも表われているごとく好ましいものではなかつたし、家庭的にも弟の病死の直後でもあるし、またその他の諸因が手伝つて、彼は今までにない無感覚状態に陥つていたと思われるのである。しかし Keats にとって、この季節は、注目すべき意味を有つように思われるのである。それは後において考察する。この期間の唯一のソネット “Why did I laugh tonight?” に見えるように、彼はここに於いて、「愛」と「死」の深刻なテーマに開眼したのであつた。

## 1. 死の諸相

### (2) 「死の恐怖」 **Timor mortis**

いかなる詩人にとつても、死と対面して、人間存在の核にふれ、魂の救済をもとめることは永遠の普遍的な課

題であろう。宗教詩人はその教義によつて、かの課題にむかうであろうが、われわれ世俗人は、世俗人の個性をもつてそれに向わねばならない。中世や十七世紀の詩人たちの死の命題は、ふだんに教義的であつた、聖者の僧侶の思想であつた。しかし Keats は、G. Herbert や H. King のような高潔な宗教詩人ではなく、A. Dante が *Divina Commedia* に顕わした、*Infelno* と *Purgatorio* と *Paradiso* の魂の苦悩の遍歴を述べた態の、俗人のそれであつた。

そして彼が死に直面するとき、Dante に出遇い、その思想を継承した事実は、Rodert Gittings の最近の研究によつて、明らかにされたが、これは決して偶然事ではなかつた。しかし詩人は、その俗人の個性のままに、彼の乱世の時代を生き、彼の *Divina Commedia* をなしたのである。

死が常住のものとなるものは、宗教詩人や、世紀末の decatant ばかりではない。晴朗なる Shelley でさえ、「死はそこにもあり、ここにもある」<sup>3)</sup>とうたうのであつたし、われわれの Keats にとつては、常に直面する対象であつた。そしてそれは彼自身の肉親との度重なる死別、また彼の肉体に宿る憂鬱病、あるいは現世への悔悟や焦慮、物質的な不運などによつて、一層真剣味をおびてくるのであつた。弟 Thomas の死の病床で書かれた最初の *Hyperion* が、絶望的な死の暗黒世界を暗示するのは、極めて当然であつた。

あるものは困苦の鎖につながれ、あるものは放浪している。

もろもろの力づくの襲撃にあつて、シウスやガンジスやブライエアリスやタイフオーンや、ドラヤーポルヒロンたちは、青息吐息して、呻吟の日々を送つていた。

暗い土牢のなかに、喰いしばつた歯をきりきりと噛んで、

太条のように組まれた手足は、痙攣を起してねじ曲り、錠前をおろしたように堅くなつていく。

困苦に脹られた巨大な胸の鼓動のほかは、身動きひとつせず、紅色にぶつぶつ煮えたぎる動脈の渦が、

暗澹たる恐怖にふるえている。……

此処にひとり、彼処にひとりと、生命のある像とも、

見えないものが、渺茫として身を横えていた  
ちようどそれは、物憂い霜月の脊になると、  
冷めたい雨が降りはじめ、物わびた荒野の、  
ドルイドの暗い石環のようだつた。

そしてかれらの洞穴の円天井は、夜もすがら、星空を

擁うていた。

Keats はギリシヤ的な イメジャリーをもつた詩人であると、Shelley 以来の批評家に指摘されてきた。なるほど *Hyperion* は、ギリシヤの古い神々の話であり、たぶんギリシヤの叙事詩の形象にあやかつたところがある。しかしその思想は、むしろヘブライ的であるように思える。これらのタイタンの神々の痛苦につながれたイメジャリーは Keats の *Infelno* なのである。弟の死をつぶさに眺めて、詩人の魂は暗澹とし、そこに於いて死は、冷やかに破壊者としての姿を顕現する。この詩のイメージが J. M. Murry の指摘する<sup>4)</sup>、現実体験そのままであるという事実は、不思議ではない。死の病床に側臥して、面接する現実の死は、かようなイメージをもつてきた。たといこの詩が、Book III に於いて、アポロの新しい神の誕生によつて、I. II 巻の死の主調と全く異つた、清澄な希望で終つていようと、やはりこの詩は、暗い死の痛苦と、死の惨さとのイメージを基調として成り立っている。そこでは歎息と静寂の天国に至る、至福にみちた死でもなく、17世紀の形而上派の僧侶の顕現した「死の冥想」*Meditatio mortis* ではなく、15世紀の詩人たちの、「死の恐怖」*Timor Mortis* を、その詩の主調となしているのである。しかしながら、ここに注意すべきことは、詩人がこのような死を感得するのは、それは想像力によるのではなく、詩人の情念と感性によるという事実である。死は彼岸のものではなく、さりとて現実の高貴な頂点に到るべきものではない。かかる否定的な「死の恐怖」をば、Keats は、まづ死に直面するときに、眺めたのである。此処にあつては、現実の悲惨を只管悲惨として、それ以上に出ずるところはなく、死の否定面を描象したのであり、それは詩人のもつとも現実的な、心象風景であつたのである。すなわち彼は、現実の抑圧からこのような「死の恐怖」をそのまま抱擁し、更に“subline”な詩にまで高揚したのである。

## (2) 「死の冥想」*Meditatio mortis*

*Hyperion* 詩は、1818年の秋から冬にかけて、弟の死の病床に於いて、その一、二巻が書き上げられたのであつた。しかしその暮の弟の死後、その筆は絶たれていたのである。この詩は元来、Milton の *Paradise Lost* や、Dante の *Divina Commedia* と同じほどの、叙事詩の大巻にする意図を、詩人が有つていた事実は、1819年に出版された、詩集の出版人 R. Hessey の *Advertisement* にも見られるように明白である。けれども結局、翌年の4月に第三巻を書き終えて絶筆してしまつたのである。

評家はそれを、詩人の tour de eorce の欠乏とか、あるいは想像力の不足とか、評しているが、いまはそのことを吟味するより、I、II 巻と III 巻のあいだの絶筆の空白期を詳しく考慮してみたいと思う。すなわちこの *Hyperion* の絶筆の期間が、いわゆる「奇妙な時」とよばれているのである。そしてこの「奇妙な時」に書かれているのが、先に少しく触れた “Why did I laugh tonight?” のソネットである。Keats の死への更に深刻な接迎は、この1819年の2月から4月にかけての、倦怠と憂鬱の季節に深まつていった。

その時代はまた、英国民にとつても最悪の時であつた。国王ジョージ三世は、永い治世(1760~1820)に疲弊し、王族たちは国民の憤慨を買う伊達のものであり、為政者は、Leigh Hunt や Cobbet などの、いわゆる進歩主義者に対して、弾圧と反動政策をとる。又、あまつさえ Six Acts を敷いて、国民の人権をしばり、農民は地主階級に搾取される。一方、ナポレオンによる大陸からの侵略による恐怖は、一応去つたものの、耐乏生活を強いられた経済社会は、著るしい不況の底に陥っていた。まことに Shelley の「1819年」に見られるものが、その年の英国の現実のありのままの姿であつた。この不条理のなかで、Keats は、「痛苦のなかではなく、無知の痛苦」所謂、彼の無感覺状態のなかで、次のソネットを書いたのである。

どうして今夜は笑つたのでしょうか、誰の声も聞こえないのに、

厳肅な答えをする神も、悪魔さえ、身をのり出して、

あるいは又、地獄から答えはしないのに、

私はただ内なる声に向つていただけです、

心よ、お前と此処で孤り悲しみに坐つていただけです、

どうして、私は笑つたのでしょうか、ああ死すべきもの

の苦しみよ!

暗闇よ、暗闇よいつも私は嘆くのです、

天上や地獄や心を求めるのが空しくなつて、

どうして私は笑つたのでしょうか、この身が、

借りものであることも、又空想が天上の至福にまで拡がることを

この真夜事に眠らないで知つているが、

世界の華かな旗がぼろぼろにちぎれるのを見ていよう

か、詩歌と名声と又美とは望ましいが、

死はそれよりさらに望ましく、生命の高価な報酬なのです。

暗い否定的な現実のなかで、孤独な魂を、「死の冥想」にいざなうものは、Verse であり、Fame であり、Beauty

であつた。この詩人を取り囲んでいるものは、この三つの像である。そしてこれらのものの交わる頂点に、死が現存する。詩人にとつて死はそれらのものより、遙かに高価な人生の報酬である。すなわち詩人は、この詩によつて、「死の哲学的命題にのり出した」<sup>9)</sup>のである。

Keats は1818年に *Endymion* を上梓したが、この年の秋には、評家はこの異教的な作品の真価を認めなかつた。しかし一方では、Byron の *Child Harold* の演出効果充分の演技が、名声を高めている。こうした文学背景のなかで、詩人としての現世の Fame に、悔悟の情を感じないのが不思議である。あるいは、おのれの詩に popularity がないという事実からして、詩人を焦燥にかり立てるとしても、無理からぬことである。彼が俗化した人気や、またそのような詩の権化としての Byron に嘔吐するもの、いつて見ればそのような世俗の名声に、焦燥や嫉妬を感じるからではないだろうか。又、この詩に於ける、Beauty は、詩人の意中の女性、Isabella Jones と Fanny Brawne とを指するのである。しかしこれらの女性も、名声と同じほど、この詩人の「奇妙な時」には、手に入れがたき品物である。悔悟と憂鬱の種子にすぎぬ。このようなとき、死の思想ともいうべき、

Death is Life's high meed.

なる最後の一句が、生れるのである。しかして、その背後を支えるものは、まさしく詩人の恋と名声への焦燥と嫉妬と憂鬱とであつた。すなわち Keats の「死の冥想」は、そのような世俗の焦慮と倦怠を通して深められたのである。

*Hyperion* の Book I, Book II は、「死の恐怖」の主題のまま筆を断たれていた。そしてこの「奇妙な時」の冥想を通過すると、再び Book III の筆をおしたのである。それは前巻の暗黒な死に対する、清澄な生命への希望に貫かれているが、その新しい希望は、詩人の「死の哲学的命題」を通つて、そこに生れる仄かな諦念に似たものであつた。Keats の死観は、*Hyperion* の Book I, II, において Timor mortis を顛わし、“Why did I laugh tonight?” と *Hyperion* Book III において、死の一層の哲学的な命題は深められたのであり、そして、この「死の冥想」は *The Fall of Hyperion* に受け継がれるのである。Gittings も評するように、彼の *Hyperion* を Dante の *Commedia* に比較するならば、*First Hyperion* は *Inferno* であり、*Second Hyperion* は *Purgatorio* である。前者が絶望的な死の地獄絵図であるならば、後者はその幾ぶんかは救いを予告する練獄の絵図である。被害者として、死を受け身に感じとつた Timor

mortis は、Meditatio mortis を経て、死すべき人間の魂の浄化へと、詩人はその死観を、発展させたのである。

I mounted up.

As once fair angels on a ladder flew  
From the green turf to heaven- "Holy Power",  
Cried I, approaching near the horned shrine,  
"What am I that should so be saved from death?"  
"What am I that another death come not  
"To choke my utterance sacrilegious, here?,"  
Then said the veiled shadow- "Thou hast felt  
What tis to die and live again before  
Thy hated hour.

(*The Fall of Hyperion ll. 134~43*)

わたしは上にのぼった、

美しい天使が、かつて緑りの芝生から天国への階段をのぼったように、「聖なる力よ」とわたしは叫んだ、その角状の社に近づきながら、

「こんなに死から免れているとはわたしはどうなのでしょうか、

わたしのこの不信心なことばを、もひとつの死がやつて来てとめないとは

わたしはどうなのでしょう」

そこでヴェールの影は云った、「おまえはさだめの時が来るまえに、死すべきものと、ふたたび生くべきものを感じていたのだ……」と

この“veiled shadow” 予告する死は我は、「わが生のなかばにして、正しき道を放れ、意に暗き森のただ中にありき<sup>9)</sup> という *Infelno* の死ではなく、「人の霊そこに浄まり、天高く登るにもふさわしきものこそなれ」という天国への祈願にはじまる *Purgatorio* のそれである。それは Dante の登る練獄界の階段のように、Keats の ladder も、緑りの芝生から天上に達するイメージにも明らかであるが、それらのイメージの類似よりも、魂の清浄をうたいあげ死を超克とする *Meditatio mortis* である。

Oftentimes I pray'd

Often, that death would take me from the vale  
And all its burthens-Gasping with despair  
Of change, hour after hour I curs'd myself.

(*The Fall of Hyperion. ll., 396~99*)

塵々わたしは心から祈った。

死が、わたしを谷間とすべての重荷から——時どきわたしは自分を呪った、運命の絶望を渴望しながら——連れ去つて行くことを。

この“terrible lines” に顛れたものは、詩人が前に、この人生の谷間にあるものを“soul making”「魂をつくるもの」として受け入れたすべてのものを、今は拒むものである。しかしそれは彼が、現実の体験や知識を、只管拒否することではない。H. Read が、「この詩の mood はただ形而上的な思索の創造の無能感からではなく、外界の抑圧から惹き起された<sup>10)</sup>」と言うように、Keats のこの死への強烈な、願望はいふなれば彼の練獄意識であろう。現世の凡てのものを拒否することによつて、詩人は逆に一切のものを獲得するのである。Read は更に同じ章に於いて「Keats はこの *The Fall of Hyperion* さえ放棄したのであり、その時、もつとも普遍的と思われる次の詩、*To Autumn* を書いたのである」と述べている。すなわち「秋の賦」において、詩人はより「深遠な、崇高な」死をば、獲得できるのである。かつて Dante や Milton を通して、地獄界と、練獄界の死を望見した詩人は、もはやこの二人の先師を完全に離れて、Keats 自身となりきつて、清澄な「死の冥想」をふまえ、一切のものを振りすて、自然との全き一致のなかに、より豊かな死を体験するのである。

Where are the songs of Spring? Ah, where are they?

Think not of them, thou hast thy music too,  
while barred clouds bloom the soft-dying day,  
And touch the stubble-plains with rosy hue;  
Then in a wailing choir the small gnats mourn  
Among the river shallows, borne aloft  
Or sinking as the light wind lives or dies;

(*To Autumn III. ll. 1~7*)

春の歌ごえはどこへ行つたのでしょうか、いまは何処にいるの、

そのことは考えなくてよい、おまえにはまたおまえの歌がある、

細長い雲は、紅くしづむ日に染え、  
バラいろに獲り入れのすんだ畑を染める、  
小さなぶよは浅瀬に悲しげにうたい、  
それは風が立ち、また消えるように、  
空たかくのぼつて消えてしまう。

この最早、東洋的な諦観に近い詩の基底には、秋の落日のごとき、晴れやかな死が、現世の痛苦をはるかに離れて、その姿を顕現するのを見落してはならぬ。これこそ Keats が *The Fall of Hyperion* のなかで、練獄の死を待ち望んだ、あとに来るべき清澄な死のすがたであり、まさに「天国にのぼるにふさわしき」死であろう。がそれは Dante の描象した世界ではなく、Keats のみが顕現しうる世界なのである。

彼の詩のイメージは、自然を媒介にして、詩想を構築するのであるが、この *To Autumn* は、もはや只管たんなる詩人による personify された自然ではなく、詩人に自然と同化することによって、逆にその自然は、詩人にとって neutral なものとして存在するのである。

### (3) 「死」の 感 覚

さて詩人の死観のもう一つの側面に、われわれは最後に目を向けたいと思う。Keats にとって死は地獄の苦痛であり、哲学的な思想の主題であつたが、死の清澄な面をしばしば地獄の苦痛よりも強調したのである。痛苦や虚無につながる死よりは、永世の樂園に到る死のイメージに、詩人はより多くおもむいたのである。かつて中世の宗教家にとつても、15世紀<sup>9)</sup>には苦痛と罪の Timor Mortis が死の主題であつたが、13世紀には天国の歓喜が、その主なるものであつたように、Keats の死観はこの13世紀の宗教家の態度を、しばしばその詩に見せたのである。そこにおいて死は、もはや困苦にゆがめられたものでも、罪の谷間で呻吟する魂もなく、平和と高貴な位を得ながら、静かな音楽のように、あるいは汚れない聖書のように、描象されるまぬがれることの出来ない死は、自然界のひとつの法として、そのままの姿で美化され、現想化され、結晶されるのである。

The calmest thoughts come round us; as of leaves  
Budding-fwit ripening in stillness-Atumn suns  
Smiling at eve upon the quiet sheaves-  
Sweet Sappho's cheek-a smiling infant breath-  
The gradual sand that through an hour-glass  
runs-  
A woodland rivulet-a Poet's death.

静かな思想がおもひ浮んでくる。ちようど  
芽をふく木の葉のように、静寂に熟する木の実、  
静止した滑車のうえに照り映える秋の陽のひかり、  
サッフォの美しい頬、微笑む幼児の呼吸、  
あるいは砂時計のなかにポロポロと落ちる砂、森のな

かのながれ、  
そして詩人の死のごとく。

詩人の死の思想は、もはや死の恐怖を超克して、自然の成熟さのあとにくる平和な静かさのなかで、なんの苦痛と悲惨さをも誘うことなく、感得される死は破壊者として、霊肉を奪い去ることはない。むしろここに於いて捉えられる死の思想は、永世彼岸の死を約束する。死は人生の終末ではない。更にまたこのような理想的な死の側面は、Keats の感覚の愉悅、とくに恋の歓喜に彼が身を忘れるときに顕現される。そこにおいては、死は罪の意識をとまらうのではなく、光明世界を予想し、現世の歓喜の連続として存在するのである。平俗人としての Keats の死に対する接近は、このようなところに躍如としてうかがえるのである。

Yourself-your soul-in pity give me all,  
Withhold no atom's atom or I die,  
(Sonnet XIX., 9~10)

おまえ自身—おまえのこころ—どうかすべてを僕におくれ、  
分子の分子までくまなく、でなければ死んでしまいたい。

あるいはまた、ふたりの恋人の<sup>9)</sup>ために書かれた有名な次の詩句

No-yet still steadfast, still unchangeable,  
Pillow'd upon my fain love's ripening breast,  
To feel forever its soft fall and swell,  
Awake for ever in a sweet unrest,  
Still, still to hear her tender taken breath,  
And so live ever-or else swoon to death.

いやむしろ私の美しい恋人の、豊かな胸にいだかれて  
じつとじつと変らないでいたい、  
その柔かな胸の起伏を永久に感じ、  
甘美な不安のなかに目覚めていたい、  
じつとじつと優しい息づかいを聞いて、永久にそうしていたい、  
そうでなければ死の卒倒にたおれたい。

(Written on a Blank Page in Shakespeare's Poems,  
facing "A Lover's Complaint")

これに見られるのは、詩人の俗世の煩惱である。執りようなまでの、女身への愛着であり、現世への執着であ

る。女身を失えば、死をも辞さない決心がある。それを単なる歓楽のまよいとするには、余りにも悲愴である。煩惱のないどんな詩人があり得るだろうか。しかし Keats は現世の歓喜のそばに、永世につながる死を側臥させているのである。すなわち恋の悦楽は、死と双子腹となつて、絡み合っていたのである。生への執念が深ければ深いだけ、この詩人の死への執着は深刻なのである。先の詩には現世の愉快にしか天国がないようにみえるが、これも後の詩と同じように、この現世唯一の天国を離れるならば、むしろ死に至るのである。現実の歓楽は、実に死によつて支えられ死に至る路である。すなわち詩人の現実的な感覚性は、ここにおいて、同時に死の理想に置き換えられるのである。

#### notes

- (1) P. B. Shelley : England 1819 II. 1~
- (2) P. B. Shelley : ibid I.
- (3) P. B. Shelley :  
 Death is here and death is there,  
 Death is busy everywhere,  
 All around, within, beneath,  
 Above is death-and we are death.  
 (from Death)
- (4) J. M. Murry : Keats and Shakespeare P. 83
- (5) R. Gittings : John Keats The Living Year P. 101
- (6) A. Dante : Devina Commedia. Inferno
- (7) H. Read : The True Voice of Feeling P. 73
- (8) M. C. Pecheux : Aspects of the Treatment of Death in Middle English Poetry
- (9) R. Gittings : John Keats The Living Year

## 2. 「愛」の諸相

### (1) 「愛」の歪み

M. Murry<sup>1)</sup>も指摘したように、Keats にとつて、「死」と「愛」とはその両腕を絡ませていたのである。すなわち、「死」の自覚と、「愛」の因子は、所詮双生児として、生れ出たものであつた。恐らくそのいずれかひとつを、単純に取り出して論ずることは不可能に近い。愛の苦悶や坐折がなければ、この詩人の死の自覚はなかつたであろうし、死の恐怖なり冥想がなければ、左程深みのある愛の恍惚境も至福をも見られなかつたかも知れぬ。一は他によつて触発され、他はまた一によつて深化されたので

ある。むろんこうした関係は、この詩人ばかりではないであろう。恐らく「死」と「愛」の命題は、どんな詩人にとつても、最初にして最後の課題だからである。しかし Keats はその「死」の思念に於いて17世紀の形而上派の聖者たちほど高遠にもなり得なかつたし、また「愛」に於いては純粋なるプラトニストにもなり得なかつた。むしろ「死の恐怖」 Timor Mortis と「死の冥想」 Meditatis Mortis とのあいだを、或はプラトニズムと肉欲主義とのあいだを、征来したのである。聖者でも放蕩者でもなく、いわば人間 Keats の「愛」と「死」の巡礼であつた。

Keats の愛は、先にも述べた、彼の死観に対すると同じように常人のそれであつた。一方に於いては、Dante の Beatrice に対するようなプラトニストであり、他方に於いては又、Don Juan の肉欲があつた。肉欲というよりは、むしろ女性に対する執念であつたかと思われる。女性讃美と、女性嫌悪の二面を、相争わせ、相調和させて、内存したのである。しかし初期においては、むしろ彼は女性嫌悪者であつたように思われる。このことは多くの評伝学者などの伝えているように「役の背がもう5インチ高ければ、イギリス詩歌の歴史は、書き変えられねばならなかつたであろう<sup>2)</sup>という、文句も単なる誇張ではなかつたかも知れぬ。このような肉体的な、Inferiority Complex と、また現実の女性よりは、心地よい自然のなかにある悦楽をのぞむ態の Mother Complex が、強烈にわざわいして、彼の対女性観を不幸なものにしたのである。むろんこうした本能は、どんな男性にも程度の差こそあれ内在するのであるが、それが余りに出すぎるときに、不幸な破綻が生ずる。Keats の Inferiority Complex は、女性の前では満足に口もきけぬほど度外れていたし、又幼児に母親を亡くした内向的な詩人の Mother Complex は病的であつたように思われる。そうした Complex が交互に作用して、役をあるときは女性嫌悪者に、またあるときは女性讃美者に指向したのである。そしてそれらの二者のものは、時としてバランスを失うのであつた。

しかしこのような Complex を有ちながらも、詩人が愛の対象としての女性を、思念において求めているあいだは、破綻が来るはずはない。それ故に恋愛の現実体験のない、*Endymion* の対女性観は、只嘗空想の世界に限られているのである。

ああ見よ役女のよるめく足を、その青白とした静脈、  
 その柔かさ、その白妙の美しさは、  
 あの海に生れ出たヴィーナスが揺籃の貝殻から立ち現

われたとき以上のものだ。

(*Song. ll., 4-6*)

女性のこのような感覚美に魅了される女性への思慕には、現実性の著しい欠乏が見えている。しかし Keats は、こうした女性の官能的な美しさを、ただ感覚のみの快楽に求めたのではなく、むしろそのような女性の魅惑的な姿態にさえ、魂の喜悅、精神の高揚を探究するのである。彼の官能の喜悅のところ、魂のそれを見落すことはできない。それ故に又、詩人はこのように霊肉の相克に対する疼痛をうたわねばならない。それはもはや現実性の稀薄というよりは、空想の世界に女性をとじこめようとする、真の夢想家の味わねばならぬ苦哀であつたと見るべきであろう。

We might commit ourselves at once to  
vengeance; we might die!

(*Edymion Book IV ll., 758-9*)

わたしたちは抱擁すれば死ぬかも知れない、肉欲の思  
いよ!

すなわち一度「高い天界の至福」にまで、女性をたかめあげた以上、彼の愛の指針は決定していた。かくして女性嫌悪者は、女性を理想界におく。そこには最早、現実の女性は存在し難いのである。それは地上に於いては、女性に対して嫌悪しか持ち得ない夢想家の高能な姿勢であつたとはいえ、現実の断崖は口をあけて待ちかまえていたのである。

## (2) ふたりの女性

Keats の恋情の覚醒は、ながい間、Miss Cox と Fanny Brawne のふたりの女性によるとされてきたが、今日では Isabella Jones によつて初めて恋に開眼した事実は Gittings の研究によつてほぼ明らかとなつた。詩人の最後のソネットとして有名な *Bright Star* も、実は Isabella 夫人に捧げられたものを、ふたたび詩人は Fanny に与えたのであつた。さらに *The Eve of St. Agnes* 可憐な美姫 Madeline も、Isabella 夫人だと考えられるようになった。Keats がこの女性に出遇つたのは、1817年の5月だとされている。すなわち *Edymion Book II* の執筆中であつた。

O sweet Isabel!

Tho' your feet are more light than a Fairy's  
feet,

Who danc es on bubbles where brooklets meet.

この女性 イザベラは、今までキイツ 学者の指摘してきた Hastings の婦人と同人物であり、詩人よりも年長の女性である。Keats は初めての出遇いに、接吻を交わしたと云つている。しかしこの婦人との情交は、熱病と顛廃とを伴うほどではなく、むしろ *Lamia* や *The Eve of St. Agnes* のなどの幾多の傑作を、詩人に歌わせたのであつた。

女性がひとたび理想の天界から、この地上に舞いおるとき、天界に於いてかつては結ばれた愛の交合は、否定的な色合をもつてくる。Isabella Jones は、後に顛われる Fanny Brawne ほど、熱烈な恋の対象でなかつたにしても、地上の女性として詩人の前に出現したのは事実である。*Edymion* は現実体験の不足から、女性嫌悪者は、逆に女性讚美者となつて、恋を理想の極点に、高めることができた。しかしこの最初の地上の女が、詩人に advise したと考えられる *The Eve of St. Agnes* においては、恋は、最初から冬の夜の寒厳な、否定的な色彩でもあつて描象される。そして Porphylo と Madeline との恋は、一応結果的には happy-ending になるが、嵐の夜の荒野に迷い出る、この若き男女の恋の結末と出発とは、地上の恋を暗示して、reality を含んでいる。むしろ、恋の歓楽は、マドリーヌ姫の美しい官能のなかに尽されてはいる。しかしそうした感覚の愉悅が、地上界の否定的な暗さのなかで、暗示されを点に、*Edymion* から *The Eve of St. Agnes* への、愛の移行を見ることが出来る官能の美しさは、魂の喜悅を伴うのみならず、現実の否定な場におかれ、そして一層その愛の景色は、濃紺悲愁のいろを及びるのである。

といつてこの詩人が、一層地上的な愛に見ざめはしても、夏の日に照らされて横わる女の屍に感興をそそる Bauderail のような、虫惑的な悪魔主義となるには、既に常人の感覚と魂がそれをさまたげるのであつた。肉塊のなかに墮落をもとめるには、あまりにも感覚の愉悅は、正常なものであつた。はじめ Isabella に与えたソネットは次のように書かれたのである。

Cheek pillowed on my love's white ripening  
breast.

*Sonnet; Bright Star*

恋人の白くふくよかな胸に頬をあてて、

この感覚は次の詩人のそれに比すれば、まるで少年のような早熟さを思わせるにすぎない。

Une nuit que j'étais pres d'une affreuse juive  
Comme au long d'un cadaure etendu.

屍のそばに横わる屍のように  
或る夜わたしはユダヤの醜女の傍にいた。

このフランスの愛欲と腐れ肉の快楽者 Bandrarily ほどの感覚の徹底した墮落は、われわれの Keats には求むべくもない。

このような詩人の愛の姿勢は、Fanny Brawne との出会い以後に於いても、あまり変化をみせていない。がその愛憎の振幅が、Isabella Jones の場合より、遙かに大きくなつたのは真実である。Isabella は年上の女性であり、愛恋の切ない相手というよりは、彼の詩のよき協力者というにふさわしい婦人であるが、Fanny は大凡 Isabella とは対蹠的な少女である。年も若く教養、人生体験もとぼしい女性が、男性に求めるものは、おのずと Isabella のような女性とは異なる。このようなとき、詩人は Don Juan の肉欲によつて女性を快楽させるか、あるいは純粋なるプラトニズムを固執するか、そのいずれかを徹底するのてなければ、女性の満足は得られないであろう。しかし Keats は、そのいずれにも執着しながら、そのいずれにも成り得なかつた。詩人が「お前なしでは、一日も生きていけない」と切実なる哀嘆を発すれば、発するほど、女性は「彼が愛していたほどは愛していなかつた」という相互矛盾は当然の帰着であつたらう。加うるに詩人は、極度に貧困していた。このような恋の一組を結びさせるものは、女性がまた真に天界の聖女と見まがうほどの可憐さを有するか、あるいは真に淫らな女性の才能を具備するか、そのいずれかでなければならぬだろう。しかるに Fanny もまたそのいずれでもない凡婦であつた。

前述した「奇妙な時」に書かれた *Why did I laugh to night?* の次の一節は、これらふたりの女性 Isabella と Fanny に対する詩人の態度を表示している。

Verse, Fame and Beauty are interse indeed,  
Bu death intenser.

すなわち Beauty は Isabella であり、Brawne 嬢である。がそれらのふたりの女性は、「死」の幻影のまえでは、影が薄かつた。これは女性を真から所有し得ない男性のいまだく幻影であろう。もしも詩人が、Don Juan になり切れば、Beauty は、いや愛欲は「死」よりも望ましかつたかも知れない。ここに至つて Keats は、女

性に対する嫌悪よりは、おのれに対する後悔、また女性に対しては悲哀を諦観とを感ぜねばならない。

### (3) Fanny Poems. 「愛」の陶醉

しかし Fanny との交情は、比較的平穩な Isabella とのそれに比較すると、Keats の人間としての弱さを一層露呈しているといつても過言ではない。Isabella との恋は、詩人の imagination の刺戟剤となつて、幾多の傑作をなさしめたのに、Fanny はむしろ詩人の詩生活にわざわざしているように見える。彼女は、なるほど Keats に数多くの恋文を書かせているし、また幾多の詩を彼女のために書かせている。しかし恋文の価値はここで論ずるいとまはないが、いわゆる彼女のために与えられた *Eanny Poems* は、(Wordsworth に *Lucy Poems* という名の恋愛詩があるので) 決して秀逸なものとはいへない。

I cry your mercy-pity-love!-aye, love.

これは詩と呼ぶよりは、むしろ生のままの感情の吐露である。そうした生々しい感情は、crystalization を通した抒情に高められるまでもなく、恋文と同じように、まだ恋人愛憐をもとめる悲痛な叫び声となつている。あるいは、次の詩、

The day is gone, and all its sweets are gone!  
Sweet voice, sweet lips, soft hand, and softer  
breast.

(Sonnet XVIII ll. 1~2)

その日は過ぎ去つた、あの甘美なものはすべて過ぎ去つたのだ。

あまい声も、あまい唇も、やわらかな手も、そしてもつとやわらかな胸も。

に見られるように、その叫びは悲痛であり、その形式は整わず、それはかの *Odes* や *The Eve of St. Agnes* などの完璧な均衡に達した同じ詩人の作とは、到底想像できないほどである。あるいはまた Endymion 理想界に於いて想うた愛の肖像は、かくも無残に地に陥ちてしまつたのである。

Brawne については、今まで批評家は様々の批難をあげてきた。しかしこの非難を、彼女のみに負わせるのは酷である。近年発表された、Rollins の書翰等によれば、彼女は決して悪女ではなく、詩人の弟 George は



妹 Fanny Keats にあつて、兄 John の死後において、なお Brawne を弁護して “I am very much gratified to hear that Miss Brawne is an amiable girl and that eccentricity has deceived my in-jormants into the belief that she is unworthy, few things could give me more Pleasure than to hear that the lady of my dear Friend and Brother John's choice should be worthy of him.”<sup>4)</sup>と述べている。

しかし Keats がこの女性<sup>4)</sup>との交合から、Isabella の場合より、詩を引き出し得なかつたのは皮肉である。Isabella 夫人に対しては客観化し得た自己も、Brawne には動きがとれなかつた Isabella は最初から独占できない女性であつたが、Brawne はどうにか許婚者となつた。そこから生ずる独占欲は、屢々詩人の心を、信じ難いほどに掻き乱した。均整ある人生態度をもとめた詩人も、恋においては、悪戦苦闘した。彼もまたこの点に於いて、Byron や Shelley と変わりなき、自己陶醉者であり、Romantics の青年にちがひなかつた。Isabella は、いわば想像の世界に限り得たけれども、Brawne のためには、執念にとりつかれたのである。むろん最初からそうなつたのではない。病いを得、財に乏しく、魂がかわいてから、詩人の神経は高ぶり、悲劇にいざなわれたのである。Brawne と Keats との出遇いは、いうなれば斜陽に咲く花であり、病んだ感覚のしびれに快癒をもとめる自慰であつたらうか。むろんそこから、いくつかの名作は産み出された。が詩として昇華されるには余りにも悲痛な体験であつたように見える。

Keats は女性に対して、他の多くの Romantics がそうであつたように自己陶醉者であつたのは事実である。先の *Fanny Poems* にあるものは、この感覚陶醉ないしは感覚逃避者の、典型的なものである。このような詩人の姿勢が、応々にして愛に於ける、自己解剖をさまたげる。それ故に、いわゆる彼の *Fanny Poems* には、女性におのれを投げ入れるのみで、ために試みるところの自己分析の双は、弱められる傾向が、見出されるのである。

#### (4) 「愛」の分析

しかしながらこのような感覚逃避者としての Keats はいくつかの Odes に於いて、Fanny に対する「愛」の絶望から、いわゆる Heart knowledge を歌いあげたのは真実である。そこでは、詩人は自己を対象のなかに私すことによつて歌いうる主観的な感情を、更に自己分析の執刀によつて、より本質的な切り込みを行つている。しかしそれらは、「愛」の達し得る究極面を顕現すると

いうよりは、あまりにも詩人の魂は孤独である。

すなわち対象に投じた自己は、再びおのれに帰るとき、孤独の苦汗をなめねばならぬのである。自己を拡大し、理想界に自己を上昇させるところの「愛」は、此処において再び自己の苦悩の種子にすぎなくなる。このような詩人にとつて、「愛」はむしろ、前面の鬼、後門の虎である。しかしながら詩人の志向するところのものは、既に決定していたのである。現実の苦悩を苦悩として、それを耐え得る否定的能力<sup>5)</sup>を、Keats は詩人の実在に求めたのである。「愛」はこのようなとき、所詮苦悩にみちた孤独に、自己を回帰せしめる媒介物にすぎない。孤独な実在を認識せる手段ともなるのである。すなわち、

Thou art my heaven, and I thine eremite.

(*The Eve of St. Agnes*: st. XXI.1.7)

おまえは私の天国、わたしはおまえの苦行の隠者。

という上の詩句は、詩人の愛に対する mood を、如実に顕わしている。

さて Keats は「愛」の分析者であるよりは、陶醉者として、より珠玉の詩句を数多くのこしているが、更に彼が「愛」の解剖を行う場合にも、その執刀を振る主体は、陶醉者としての趣きがある。たとえば *The Eve of St. Agnes* の、

All eyes be muffled, or hundred swords

Will storm his heart, Love's fev'rous citadel:

(*The Eve of St. Agnes*: st. X ll., 2~3)

すべての眼が閉じられよ、でなければ百の剣が、彼の胸板、その恋に燃ゆる根城を襲うだろう。

こうした中世の romance を偲ばせる「愛」の、一か八かの法則をのべる理屈の底にも、その陶醉者の面目を Love's fev'rous citadel に見出すことができる。またそれが彼の理性による「愛」の解剖を、多彩にいろどる原因ともなるのである。またそれ故に格調高く歌いあげられるのである。現代の詩は、もはやこうした Pathetic な要素を、完全に拒否してしまうけれども、詩に於ける Pathetic なものは、それ自身すこしも低次のものではなくて、要するにそれにいかなる思想が結びついているかが問題なのであり、Pathetic fallacy は Romantics の伝家の宝刀であるが、ただそれが余りにも繰り返され抜かれるために、思想的な骨格を弱める結果にならざるを得なかつたのである。しかし次の詩においては、Romantics の陶醉者としての面目が、その思想と全き一致

点に達するときがある。

Or if thy mistress some rich anger shows,  
Emprison her soft hand, and let her nave,  
And feed deep, deep upon her peerless eyes.

(*Ode to melncholy: st. ll., 8~10*)

あるいはもしおまえの女が  
快ろい怒りを見せるならば、柔かな腕にまかれて、  
怒るままにし、較ぶもののない瞳をふかくふかく眺め  
るのだ。

このような感覚のイメージは、もはや単なる感覚のみでなく、その背後に哲学によつて表現され得ない思想がうたわれるのである。Keat 此処に示された「愛」の姿勢は、凡てのものを、混然として受け入れることである。恋人の怒りも、較ぶべくもない美しい瞳も、すべてのものを所有する。むろんこれは、ちょうど彼が「死」に於いて *The Fall of Hyperion* や *To Autumn* で一切を放棄して、且つまた一切を取得したのと、対蹠をなすものである。ここでは凡てのものを所有しても、また同時にそれを失うのである。いや詩人に、それを失う決意はある。しかしながら、「愛」への深い陶醉なしに、その分析が行われ得ないとするならば、Keatsこそは、まことに真なる「愛」の分析者であつた。

#### notes

- 1) J. M. Murry: Keats & Shakespeare.
- 2) J. M. Murry: *ibid*
- 3) Keats は 1818 年 9 月 22 日付 Renolds にあてた手紙に、恋の経験はないが、「あの女性」つまり Isabella Jones のことを思つていると述べているが、Endymion は 1817 年の 3 月から 11 月の間に書きあげられたのであるから、Isabella 夫人とは、1817 年 5 月に出遇つていても、恋は芽ばえていなかつたとみるのが至当であろう。
- 4) H. E. Rollins: *More Letters & Poems of the Keats' Circle*. P. 24.
- 5) Keat's letter にある Negative Capability をさす。

## 結 び

「死」と「愛」の命題は、おそらくすべての詩人や作家の普遍的な課題であると思われる。とくに Romantics の詩人や、作家にとっては、究極の問題であろう。しかし Keats ほどこれらの「死」と「愛」を、普遍的に探究した詩人も (Shakespeare が普遍的であるように) すぐ

ないであろう。むろん彼には「死の恐怖」もあれば、「死の冥想」もある、また「愛」の陶醉もあれば、その分析もある。しかしながら彼にあつては、それら一切が肯定され得るのである。すなわちそれらのものがすべて、あるべき理由と、価値とを有つている彼は、現代のリアリストがなすような、ただ単なる探究者にとどまるのではない。すべての現実体験を受け入れ、そして同時にそれらを敢然と放棄する。すなわち彼のいうところの Negative capability である。Keats の自我の構築は、そのような現実放棄と、吸収との表面上は相矛盾する二つの相の上に立つているが、しかしこれは全一なるものであろう。ここに於いては Keats は、なお今日にも生きていのである。Keats にとつて「死」であれ、「愛」であれ、「自然」<sup>1)</sup>であれ、彼の対象となるものは、すべて彼の個性のためにゆがめられて捉えられることは殆んどない。彼はその書翰のなかで、詩人ほど「個性のないものはない」と明言するのでも解る。彼が他の Romantics よりも、普遍的なのはこの理由に於いてである。

J. M. Murry の *Keats & Shakespeare* と、佐藤清氏の「キイツ研究」<sup>2)</sup>には無感覚状態と彼の詩的想像力に関する極めてふかい洞察が示されているが、Keats はこの 1819 年 2 月から 4 月に径る期間の、いわばこの心身の放心状態に、「死」と「愛」にきわめて深刻な接近と開眼をしている事実は、興味ふかいと思う。この詩人の創作心理の過程に、この無感覚状態は、非常に重要な因子となつているが、(むろん「死」と「愛」への真摯に対面には、その背後にそれをさそうさまざまな嫉妬や焦慮や苦悩の現実的な要因の抑圧が存在してのことであるけれども) この Strange Period と呼ばれるところの、Keats の 1819 年 2 月の無感覚状態は、彼の詩生活に於いても、重要な一転機をなすものであると思われる。

さいごに Love を描象する Keats の詩のイメージの特徴として、irony を指摘しなければならない。それは形而上派の詩人のそれに比するには、いささか虫惑性を欠くかも知れないけれども、彼の Love image の面白さは ironical などところにあるが、その詳しい序述は紙面の都合で割愛しなければならない。

#### notes

- 1) 出口泰生(保夫): キイツの対自然のイメージ(早大 学術研究) vo. IV
  - 2) 佐藤清: キイツ研究(英詩研究社)
- 追記 なお本稿の「Timor mortis」と「Meditatio mortis」は、昭和 32 年 6 月日本英文学会(於立教大学)に於いて、発表したものに、補筆したものである。

本学専任講師 英文学専攻